

D-6

日本語における慣用句の創造的使用について —形容詞の反義語を手がかりに—

鈴木あすみ (東北大学大学院 博士後期課程)

1. はじめに

慣用句は一般に固定性が高く、語彙的柔軟性を欠くとされている (Liu, 2008; 宮地, 1982)。慣用句が固定的であることを表す特徴の 1 つに、構成要素の語を反義語に置き換えることができない場合が多いことが挙げられる。西尾 (1985) は慣用句の中でも形容詞を中心とするものに焦点を当て、以下のように分析している。例えば「厚い」と「薄い」は反義関係にあるが、(1a) に対して (1b) は慣用句として成立しない。このように、形容詞同士が反義関係にあっても、それらが反義関係にある慣用句を作り出せるとは限らない。

- (1) a. つらの皮が厚い
b. *つらの皮がうすい

(西尾, 1985)

しかしながら、(1b) のような句は一般に慣用句とは認められないものの、いわゆる「言葉遊び」としての使用・理解は可能である (2a, b)。(2) に示す三浦梅園の言葉は倫理的な学問観を戯画的・風刺的に表現し、学者にありがちな学識の見せびらかしを指摘するものである (木村, 1973)。このような創造的な言語使用の多くは何もないところから突然に生み出されるのではなく、既存の表現を修飾・変形することで「作り直される」ものである (Partington, 1996)。(2a) は「恥知らずで図々しい性質」を表す慣用句である「面の皮が厚い」に含まれる「面」を「足」に、(2b) は「厚い」を「薄い」に置き換えることで作り出された新奇な言い回しである。読み手はこのような表現を目にした際、元となる慣用句である「面の皮が厚い」を想起し、その情報に基づいて「人に見えない質実さに重きを置き、体面ばかり繕うことを慎むべきである」という解釈を行うことができる。

- (2) 学問は飯と心得べし。腹にあくの為なり。かけ物などのように人に見せんずる為にはあらず。衣装うつくしくかざり、人に好かれんとするは売女なり。人の見る時躰をなし、人に褒められんとするは歌舞伎ものなり。今の学者はどうやらこの真似するようなり。a. 足の皮はあつきがよし。b. つらの皮はうすきがよし。人もろともに小ざかしく口はきけど行いは女童に見限らる。さるゆえ面の皮あつくなり、足の皮うすくなり、株ふむこと多し。よく心得てつつしむべし。

(三浦梅園『戲示学徒』, 成立年代不明)

Partington (1996) によると、創造的な表現の解釈に際してはまず音韻・機能・意味などの類似性に基づいて元となる表現が想起され、その意味をもとに創造的な表現の意味が理解される。しかし、創造的な表現の解釈は元の表現との類似性だけではなく、文脈からの情報にも支持されていると考えられる。(2) の全体を見ると、(2a, b) の表現する意味と類義・反義の表現 (二重下線部) や元の慣用句である「面の皮が厚い」(波線部) が文脈中に出現していることが分かる。本研究は (2b) のような慣用句の一部を反義語へ置き換える用法を手がかりに、固定的な表現の生産的な使用が文脈からどのような支持を受けて理解されるのかを明らかにすることを目的としている。

2. 調査

2.1 予備調査

まず、形容詞を中心とする慣用句の中で最も典型的な「名詞＋が＋形容詞」(西尾, 1985) を辞書形にもつものを現代言語研究会 (2007)、丹野 (1998)、米川・大谷 (2005) の3冊の日本語慣用句辞書から目視で抽出した。それらのうち、反義関係にある形容詞の片方だけが慣用句として用いられる句 (例：食が細い/*太い) について、「*食が太い」のように辞書に掲載が無い方の句14種の用例を『国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)』から抽出した。検索条件は形容詞をキーとし、その前方3語以内に慣用句に含まれる名詞 (例：食) が共起する例を収集した。検索結果総数が300を超える場合は全検索結果の中からランダムで抽出した300例、それ以下であれば全検索結果を予備調査の範囲 (表1「分析例」) とした。こうして設定した範囲の中から慣用句的な意味での用例のみを目視で拾い、その粗頻度 (表1「うち慣用句的用法」) および分析例に対する比率 (表1「慣用句的用法比率」) の高いものを本調査の対象として選んだ。「頭が柔らかい (考え方が柔軟な様子)」「息が短い (長続きしない様子)」「腰が軽い (気軽に行動を起こす様子)」「食が太い (たくさん食べる体質)」「神経が細い (些細なことでも気にしてしまう性質)」「造詣が浅い (知識が乏しい様子)」である (表1星印)。

表1 予備調査結果

調査対象	検索結果総数	分析例	うち慣用句的用法	慣用句的用法比率 (%)	
造詣が浅い	80	80	80	100.00	★
頭が柔らかい	2,319	300	284	94.67	★
食が太い	162	162	145	89.51	★
神経が細い	447	300	246	82.00	★
面の皮が薄い	20	20	14	70.00	
息が短い	142	142	93	65.49	★
態度が小さい	69	69	43	62.32	
腰が軽い	997	300	124	41.33	★
血の気が少ない	38	38	15	39.47	
影が濃い	1,142	300	108	36.00	
足が軽い	2,566	300	9	3.00	
心臓が弱い	2,212	300	7	2.33	
気が少ない	289	289	0	0.00	
耳が近い	223	223	0	0.00	

2.2 本調査

「頭が柔らかい」「息が短い」「腰が軽い」「食が太い」「神経が細い」「造詣が浅い」の慣用句的な意味での用例全てを対象に、変形操作の有無と共起表現を目視で調査した。「頭が柔らかい」「腰が軽い」「神経が細い」については予備調査の範囲としなかった部分も含め、慣用句的な意味の用例を全て目視で抽出したうえで調査を行った。調査にあたって着目したのは (a) 助詞の種類、(b) 副詞等挿入の有無、(c) 語順の入れ替えの有無、(d) 否定との共起、(e) 強調を表す引用符の有無、(f) 共起表現の6点である。

(c) 語順の入れ替えの有無についてはNWJCで形容詞をキーとして後方3語以内に慣用句中の名詞が共起する例を収集し、慣用句的な意味での用例を目視で拾い上げた。こうして得た語順の入れ替えのなされた句についても(a)～(f)に基づく調査を行っている。(f)共起表現に関しては、調査対象となる句の前後の文脈に、それが慣用句的な意味で用いられていることがわかるきっかけとなるような表現があるかどうかを調べた。NWJCの検索結果には当該表現が含まれる1文のみが表示されるため、前後の文脈については出典元のサイトにアクセスして調査した。着目したのは以下のような例である。

- (ア) 元の慣用句が調査対象の句とは別に文脈中に出現している例
- (イ) 元の慣用句と調査対象の句が融合した例
- (ウ) 元の慣用句に含まれる形容詞のみが文脈中に出現している例
- (エ) 別の慣用句が文脈中に現れている例
- (オ) 調査対象の句が表す意味の類義表現が文脈中に出現している例
- (カ) 調査対象の句が表す意味の反義表現が文脈中に出現している例

3. 結果

調査項目(a)～(e)の結果は表2に示す。調査対象の句に含まれる助詞の種類は様々であり、副詞等の挿入、語順の入れ替え、否定との共起、強調を表す引用符の使用が多く観察された。調査項目(f)共起表現の総数は表3～9に示す。(ア)～(カ)のような共起表現の慣用句別の出現数は「頭が柔らかい」で4,017例中1,328例(33.1%)、「息が短い」で87例中28例(32.2%)、「腰が軽い」で377例中183例(48.5%)、「食が太い」で145例中75例(51.7%)、「神経が太い」で414例中163例(39.4%)、「造詣が浅い」で70例中6例(8.6%)であった。表3～8の括弧内は各調査対象の用例数における割合、表9の括弧内は本調査の対象となった句の総数(計5,112例)における割合を示している。

表2 各調査対象の総数と調査項目(a)～(e)の粗頻度

	頭が柔らかい	息が短い	腰が軽い	食が太い	神経が太い	造詣が浅い
総数	4,017	87	377	145	414	72
(a) 助詞 (括弧内は 出現頻度)	を (1,245) が (1,078) の (863) 無助詞 (336) は (173) も(123) って (5) さえ (1) まで (1) よ (1)	が (47) の (26) は (8) 無助詞 (4) も (2)	が (139) の (116) も (32) 無助詞 (30) を (22) は (11)	が (93) の (35) は (7) も (5) を (2) 無助詞 (2)	が (153) 無助詞 (101) の (93) は (12) も (6) を (1) など (1)	が (40) の (21) は (5) 無助詞 (3) も (1)
(b) 副詞等挿入	93	4	5	4	5	7
(c) 語順入れ替え	191	0	27	1	47	2
(d) 否定	40	0	2	20	10	2
(e) 引用符	37	1	11	5	3	0

表3 「頭が柔らかい」の共起表現

共起	前文脈	同一文内	後文脈
(ア)	188 (4.7%)	47 (1.2%)	129 (3.2%)
(イ)	0 (0.0%)	102 (2.5%)	4 (0.1%)
(ウ)	4 (0.1%)	12 (0.3%)	4 (0.1%)
(エ)	6 (0.1%)	13 (0.3%)	3 (0.1%)
(オ)	153 (3.8%)	226 (5.6%)	102 (2.5%)
(カ)	124 (3.1%)	112 (2.8%)	99 (2.5%)

表4 「息が短い」の共起表現

共起	前文脈	同一文内	後文脈
(ア)	4 (4.6%)	3 (3.4%)	9 (10.3%)
(イ)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
(ウ)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
(エ)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
(オ)	1 (1.1%)	5 (5.7%)	1 (1.1%)
(カ)	2 (2.3%)	1 (1.1%)	2 (2.3%)

表5 「腰が軽い」の共起表現

共起	前文脈	同一文内	後文脈
(ア)	13 (3.4%)	5 (1.3%)	13 (3.4%)
(イ)	0 (0.0%)	27 (7.2%)	1 (0.3%)
(ウ)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
(エ)	0 (0.0%)	4 (1.1%)	2 (0.5%)
(オ)	21 (5.6%)	53 (14.1%)	19 (5.0%)
(カ)	10 (2.7%)	9 (2.4%)	6 (1.6%)

表6 「食が太い」の共起表現

共起	前文脈	同一文内	後文脈
(ア)	13 (9.0%)	4 (2.8%)	3 (2.1%)
(イ)	0 (0.0%)	5 (3.4%)	0 (0.0%)
(ウ)	0 (0.0%)	1 (0.7%)	1 (0.7%)
(エ)	0 (0.0%)	1 (0.7%)	0 (0.0%)
(オ)	13 (9.0%)	11 (7.6%)	15 (10.3%)
(カ)	4 (2.8%)	3 (2.1%)	1 (0.7%)

表7 「神経が細い」の共起表現

共起	前文脈	同一文内	後文脈
(ア)	10 (2.4%)	3 (0.7%)	7 (1.7%)
(イ)	0 (0.0%)	7 (1.7%)	1 (0.2%)
(ウ)	0 (0.0%)	11 (2.7%)	0 (0.0%)
(エ)	1 (0.2%)	7 (1.7%)	1 (0.2%)
(オ)	21 (5.1%)	39 (9.4%)	23 (5.6%)
(カ)	9 (2.2%)	10 (2.4%)	13 (3.1%)

表8 「造詣が浅い」の共起表現

共起	前文脈	同一文内	後文脈
(ア)	1 (1.4%)	1 (1.4%)	0 (0.0%)
(イ)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
(ウ)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
(エ)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
(オ)	0 (0.0%)	3 (4.3%)	1 (1.4%)
(カ)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表9 共起表現の出現数 (全調査対象合計)

	前文脈	同一文内	後文脈	合計
元の慣用句 (別出現)	229 (4.5%)	63 (1.2%)	161 (3.1%)	453 (8.9%)
元の慣用句と融合	0 (0.0%)	141 (2.8%)	6 (0.1%)	147 (2.9%)
形容詞のみ	4 (0.1%)	24 (0.5%)	5 (0.1%)	33 (0.6%)
別の慣用句	7 (0.1%)	25 (0.5%)	6 (0.1%)	38 (0.7%)
類義表現	209 (4.1%)	337 (6.6%)	161 (3.1%)	707 (13.8%)
反義表現	149 (2.9%)	135 (2.6%)	121 (2.4%)	405 (7.9%)
合計	598 (11.7%)	725 (14.2%)	460 (9.0%)	1783 (34.9%)

4. 考察

NWJC を用いた調査からは、「食が太い」のような耳慣れない句が語順の入れ替えや副詞の挿入、語の置き換えといった様々な変形を受けながら実際に使用されている例が多く確認された。このような句はその元となる慣用句や別の慣用句、類義・反義表現などとともに用いられることが多い。このことは、既存の慣用句を用いた言葉遊びが文脈からの支持によって受け手に伝達されることを示唆している。

4.1 元の慣用句との共起

調査対象とした句の元となる慣用句が共起する例 (3) は 453 例と、調査指標とした共起表現の中で 2 番目に多い。新奇な表現の直前・直後の文脈に元の慣用句が出現すれば、受け手の脳内でその意味が活性化する。それゆえに、発話者は「受け手は新奇な表現の意味を元の慣用句から推測して理解できるはずである」という前提に立ち、通常は認められない表現を用いることができる。また、受け手側は活性化した元の慣用句の意味に基づいて新奇な表現の意味を容易に推論することができる。調査対象とした句が元の慣用句と融合している例 (4) も 147 例見られ、同様の働きをもつと考えられる。

(3) 大人になると頭が固くなるというけれど、私が知っている限り、大人でも頭が柔らかい人なんてたくさんいる

(<http://cocolifeinvancouver.blog.fc2.com/blog-entry-202.html>)

(4) 著者が言っているとおり、読むと固い頭が柔らかくなります

(<http://ameblo.jp/kouji-r/theme-10002965652.html>)

4.2 元の慣用句に含まれる形容詞との共起

元の慣用句に含まれる形容詞のみが共起する例 (5) は全体として 33 例と少なかったが、これも元の慣用句を想起するのに重要な役割を果たしている。例えば「頭が柔らかい」では「身体は固いのには頭は柔らかい」、「神経が細い」では「体は太いのには神経は細い」という用法が見られた。これらは一種の洒落であり、「身体は固い」「体は太い」で字義的な意味として用いられている「固い」「太い」との対比によって「頭が固い」「神経が太い」という慣用句の本来の形が想起されると考えられる。

(5) 体は太いのですが、意外と神経が細い所があつて

(<http://fookom5656.blog14.fc2.com/blog-entry-502.html>)

4.3 別の慣用句との共起

元となる慣用句とは別の慣用句が共起する例 (6) は 38 例であった。こちらも低頻度ではあるが、文脈中に慣用句が現れることで、その近くの新奇な表現も慣用句的な意味であるということに受け手が気づききっかけとなる可能性がある。また、「頭が柔らかい」に対して「頭が古い」「読みが深い」、「腰が軽い」に対して「筆が速い」「尻が重い」、「神経が太い」に対して「気が弱い」「心臓が強い」など、句のレベルで類義・反義関係にあるような慣用句の出現が目立った。したがって、これらの慣用句は意味の面からも新奇な表現の理解を促進する効果をもつと考えられる。

(6) しかも非常に腰が軽く、筆も速い方なので、すでにキャラデザの摺り合わせから挿絵ラフまでト

ントン拍子に進んでおります。

(<http://ogiso.blog107.fc2.com/blog-date-20130818.html>,<http://ogiso.blog107.fc2.com/category7-1.html>)

4.4 類義表現、反義表現との共起

調査対象とした句の類義表現が出現する例 (7) は 707 例、反義表現が出現する例 (8) は 405 例確認された。これらは新奇な表現の理解を意味の面から支えていると考えられる。特に類義表現が同一文内に共起する例が 337 例 (全調査対象の 6.6%) と多い。これは調査対象とした句の言い換えや補足としての機能をもっており、受け手が新奇な表現の意味を理解する際の重要な手がかりになるとみられる。

(7) でも以外と食が太く、モリモリ食べて育ってくれました

(<http://44555.blog119.fc2.com/blog-entry-91.html>)

(8) また、割と長く持つキーワードと、句と言うか流行の息の短いキーワードを選ぶかでも対応が変わってきます。

(<http://affirikouryaku.blog104.fc2.com/blog-date-201001.html>,<http://affirikouryaku.blog104.fc2.com/blog-category-8.html>)

5. 総合考察

本研究では慣用句を元とした新奇な言い回しに着目し、以下の 2 点を明らかにした。

①慣用句は固定性の高いものでありながら、様々な変形を受けて生産的に用いられ得る

②①のような用法は文脈中に元となる句を想起させるような表現を伴うことが多い

木村 (1973) は三浦梅園の『戯示学徒』に対し「言い得て妙」という評価を下している。(2) に見るような慣用句の創造的な用法は単なる伝達に留まらず、気の利いた言い回しとして表現そのものを際立たせる詩的機能 (ヤコブソン, 1984) をもつと考えられる。こうした表現は、ブログや掲示板など一般の人々による日常的な書き言葉にも多く認められる。固定的な慣用表現を柔軟に変形させることで新たな表現を作り出し、それを理解するプロセスは、人間が一般的にもつ認知能力に支えられていると言えよう。

参照文献

現代言語研究会 (2007) 『日本語を使いさばく 慣用句の辞典』東京：あすとろ出版。

ヤコブソン, R. (1984) 『言語とメタ言語』(池上嘉彦、山中桂一 訳) 東京：勁草書房。

木村俊夫 (1973) 「三浦梅園の学問観と方法論」『茨城大学教育学部紀要』23, 189-196.

国立国語研究所コーパス開発センター編 (2017) 『国語研日本語ウェブコーパス』(2014-4Q データ, 梵天バージョン 1.0.0). <https://bonten.ninjal.ac.jp/>, (2017 年 10 月 10 日確認)

Liu, D. (2008) *Idioms: description, comprehension, acquisition, and pedagogy*. New York: Routledge.

宮地裕 (1982) 『慣用句の意味と用法』東京：明治書院。

西尾寅弥 (1985) 「形容詞慣用句」『日本語学』4 (1), 45-53.

Partington, A. (1998) *Patterns and meanings: using corpora for English language research and teaching*. Amsterdam; Philadelphia: J. Benjamins Pub.

丹野顯 (1998) 『意味から引ける慣用句辞典』東京：日本実業出版社。

米川明彦、大谷伊都子 (2005) 『日本語慣用句辞典』東京：東京堂出版。